

# 牧神の午後

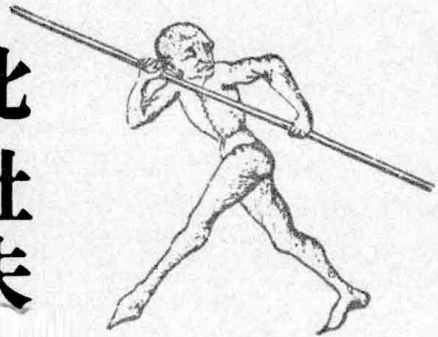
## 北杜夫



# 牧神の午後



# 北杜夫



牧神の午後

©1975

昭和50年3月10日 印刷

昭和50年3月20日 発行

著者 北 杜夫

発行者 高梨 茂

印刷所 三晃印刷

---

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京2-34

目次

病氣についての童話

百蝶譜

幼いメルクリウス

茸

岩造の話

蝦蟇

俗物

狂詩

パンドラの匣

牧神の午後

硫黄泉

誕生

3

41

105

125

157

177

牧神の午後



病氣についての童話

## 百 蛾 譜

寝ついてから三日目に、少年は低い声で尋ねた。何時になったら梅干食べていいの？ 何の味もない食事の世話をしてやっていた母親は、さりげなく、少年の顔を見ないようにして答えた。そうね、あと十日。少年は黙って頷いて、ぼんやりと定まらぬ、ほのぐらい瞳で天井の木目を眺めた。

幼い頃からひよわなこの少年は、病気に親しみを抱いていた。稲妻型に上下する体温表の赤線を、沁みるような氷囊の感触を、枕元の薬びんに沈まっている、うす黄いろい透明な液体の色を好んでいた。熱っぽいけだるさや、しくしくと痛む身体や、病室の特有な湿っぽい臭いなどをさえ愛しました。それから食物。病気になる、どうして平素はつまらない梅干が、あんなにも鮮やかに目に映るのだろう。少年は、真白な薄い粥のうえに、大粒の梅干をそっと載せて、悲しいほどの鮮紅色が周囲に滲んでゆくのを見るたびにこう考えた。熱さえ出せば、この不思議な、僕ひとりには分からない、病気の持つ秘密に接することができる。それなのに、今度の病気は重そうなのに、両親や医者の様子から見てもただの風邪なんかじゃないのに、なぜ梅干を食べてはいけ



ないんだらう。少年は、病氣といえは梅干を食べるものと考えていた。梅干の、真赤な色が見られないのが、せい一杯顔をしかめさせる酔い味に親しめないのが寂しかった。——少年は急性の腎炎を病んでいたのである。刺戟物や蛋白質を摂らしてはいけなないと、医者は両親に告げた。その医者は、なぜかクリームの匂いがぶんぶんした。そして、とても海豹あざらしに似た顔立ちをしていた。

十日すぎても梅干は食べられなかった。十日どころか、半月一箇月とたつても、食事は相かわらず塩気のないものばかりだった。腎臓病のために無塩醬油というものがあつたが、奇妙な薬品の味がするばかりなのである。しかし少年は、口に出して不平も言わず、味のない食事を摂っては大人しく床についていた。時間が、恐ろしく単純に、平らかに、退屈に過ぎて行つた。何の変化もない日々だった。痛みもなかつた。熱もなかつた。少年は何回も天井の木目を数え、障子にさす日ざしの移るのを眺めていた。そして酔い梅干の味にこがれ、それにも諦らめを抱くと、今度はきらびやかな色彩にあこがれた。元氣だつた夏、学校の宿題として集めた昆虫たちがその対象となつた。黒い大きな鳳蝶おひばともあつた。溜璃色の小灰蝶こはももあつた。紅色の下翅したばを持った天蛾あまがもあつた。病氣が、少年の心をふかく沈ませ、なぜかあの翅の形が、鱗粉のきらめきが、この世のものならず美しく思ひだされた。すぐと母親に頼んで、押入れから標本箱を出してもらつた。床に仰向いたまま、両手に箱を持って、冷たい硝子蓋のなかを覗きこんだ。少年はがっかりした。とても大きな失望だったのである。蝶も蛾も甲虫も、みじめに黴につつまれて、そのうえ虫に喰われていた。触角が折れ、翅が歪んでいた。これはひどい。防虫剤を入れてなかつたのだ。少年は

顔をしかめて考えた。ぜひ新しく採集して、きれいな標本をこしらえなくちゃあ。そして、また思った。今は冬だっけ。まだ十二月だっけ。それに、僕はまだ起きられないのだったな……。少年は腫をかすませて天井を見あげた。そこには、もう暗記している木目が、陳腐な模様を形造っていた。――

ある日、少年は嬉しかった。尿の蛋白が大変減ったから、白身の魚を食べてもいいと、口ひげのなから医者が出たのである。少しは床のうえに起きあがってもいいのだった。そのうえ、父親がきれいな本を買ってきてくれた。昆虫図譜。少年は、ふるえがちな、白い、ほそい手で頁をくって、新鮮な印刷インクの匂いをかいだ。珍しい昆虫の姿態に胸をときめかせた。そして和名の下に、横文字で書かれてある学名をうっとり眺めた。“カラスアゲハ”。あの金びかの鳳蝶は、カラスアゲハというんだな。カラスアゲハというのが本当の和名なんだ。そして学名は？ 少年は父親に横文字を読んでもらった。パピリオ・ピアノール・ジャポニカ。なんて物々しい、高尚な、えらそうな名前のことか。パピリオ……パピリオクリムというのがあったっけ。僕のお医者さまは、いつもクリムの匂いをぶんぶんさせてる。ところで、どうしてあのお医者さまは、ああも海豹あざとに似てるんだらうな。

繰返し繰返し、少年は昆虫図譜を見た。どの頁もほとんど空で覚えてしまうほど眺めたのである。――このとびぬけて雄大な甲虫は“テナガゴガネ”というのだ。産地は台湾。だからちよっ

と捕えにゆくという訳にはゆかない。このフェアリーを思わせる蝶は「アサギマダラ」だ。これは内地にもいる。なんて美しい蝶だろう。こんな蝶が採集できたら、嬉しさのあまり、吃逆しゃつりがでて止まらなくなるかも知れない……。しかし少年は蝶よりも蛾のほうが好きになっていた。病気が、その心をしめやかに翳らしていたからである。蛾のほうが、より湿っぽく、より深く、より底が知れなかった。そういう点がかえって少年を惹きつけた。昆虫図譜の末尾には、附録として昆虫採集法が載っていた。燈火採集法というものがある。森林のなかに、白い布を張りめぐらして、煌々とアセチレン燈をとすのだ。何百という蛾が集ってきて、白布にとまったり、燈のまわりを乱舞するのだ。僕はそこで捕虫網をふりまわす。蛾の群がさっと散る。眩しく翅粉が光に映え、見る見る毒壺は美しい蛾で一杯になる……。そんなことを考えるとき、少年の瞳はどこか遠くを見つめながら、へんに熱っぽく輝いた。

父親は煙草の吸いさしを火鉢の灰にさすと、少年の顔に眼をやった。眠っているのだろうか。閉ざされた睫毛の先がかすかにふるえていた。なにか痛々しげに、ゆるんだ口元から不規則に息が洩れていた。眼の下の隈どりがやつれた感じを与えていた。熱でも出たのじゃなからうか。そっと額に手を当ててみた。熱い。そう思った。ずっと熱などなかったのに。でもよく眠っている。べつに大したことじゃあるまい。それに今日は先生の来られる日だし……。父親は無意識に火鉢のふちを撫でながら、もの思いにふけた。この子は近頃なんとなく変ってきたようだ。いかに

も子供供したその眼。それがどうかすると、はっとするほど遠くを見つめている。いや、奥ぶかく何かを探っている。それに、この昆虫図譜。今枕元に開かれたまま投げだしてあるこの本。この本に対するような沈んだ熱中を、今までこの子が示したことがあつたらうか。たしかに変つてきた。病気のせいだろうか。病気が、人の心を精神の深みへと連れてゆくというような作用でも持っているのだろうか。——父親は炭火にそそいでいた眼をのろのろと腕時計に持つて行った。それから窓の外を眺めて思わず舌打ちをした。雪。しずかに灰色の空から粉雪が舞いはじめていた。でも出かけねばなるまい。大切な会議があるのだから。部屋へ十能を持つてきた母親が、おや、もうお出かけですかと、慌ててオーバーをとりによく後姿に向かつて、父親はおだやかな口調で言った。少し熱があるようだから、気をつけてくれ。

……あたり一面、ぼや々と霞んでいた。これは霧であろうか。少年はうつうつとあたりを見まわした。苔に幹をつつまれた老木が、闇のなかに立ちはだかっていた。いつの間にか、少年は森の中にもいたのである。しつとりと曇った夜だった。どうしてこんな森のなかに迷いこんできたのだらう。ふと気づくと、目の前に大きな白布が張られてある。燈火採集に使う白布であつた。少年の鼓動は高まつた。アセチレン燈は？ やはり準備されていた。白布の前にちゃんと火をつけるばかりになって置かれてあつた。ためらわず、少年はアセチレン燈に点火した。白昼よりも眩ゆく、光輝が暗闇めがけてとび散つて行った。古びた樹木の肌が、曲りくねつた枝が、物怪ものまがのよ

うに闇のなかから浮びあがった。おびえたように少年は、長いあいだそこに坐っていた。これから、何が起るのだろうか？ ……突然、底ごもりした羽音が聞え、黒い影が光を横ぎり、狂おしく旋回し、ゆらゆらと白布がゆれた。なにか分らぬ蛾が白布にとまったのである。少年はびくっと瞳を凝らした。胸ははげしく動悸した。ああ、やっぱり本当だった。一匹の、胴の太く翅のどがった、大きな素晴らしい蛾が、すぐ目の前に、輝いている白布のうえに、じっととまっているのが見えた。静かに、静かに！ 少年は息を殺した。なんと、蛾だろうか？ 少年は知っていた。"キイロスズメ"。昆虫図譜の第二二図版に載っていたのである。あざやかな緑の腺が背中を走っていて、腹部はなまめかしい黄色なのだ。あのにぶく燻んだ複眼はどうだろう。きっと僕の様子を覗っているのにちがいない。静かに、静かに！ さて、どうしたものだろう。きっと僕の周囲をひらひら舞いはじめた。なんだろう？ これも知っている。"シロヒトリ"にきまっている。純白の翅、腹にちりばめた赤い紋列、とびぬけて優雅な蛾。幾度、写真版のシロヒトリを眺めて吐息をついたことだろう。あ、また飛んできた。尺取蛾だな。きっと"クロスジアオシヤク"というのだろうか？ ……しかし、やがて少年の思考力は丸つきり奪われてしまった。真に無数の蛾が飛んできたのである。天蛾、毒蛾、枯葉蛾、天蚕蛾、尺蛾、燈蛾、螟蛾、——すべての蛾が燈をめぐって円を画いた。目もあやな饗宴である。青い蛾、黄色い蛾、赤い蛾、透明な蛾、——疲れはてた蛾たちは、白布のうえに、ふしぎな模様を織った翅を休める。するとちいさな複眼が

燃えたった。紅玉のような、緑玉のような、金色の、銀色の、不気味に美しい複眼が少年をじつと見つめていて。——こうして、とめない酩酊が、めくるめく耽溺が、少年の周囲に展かれて行った。少年は、おののいて、捕われて、金縛りに会ったように凝視した。気を失いそうになりながらも見とれつくした。病気が、少年の瞳を、ひろく大きく奥ぶかく澄ませ、透視の力を与えていた。柔かな心のなかを、眩ゆい翹粉が、擦り、流れ、まさぐり、どこまでもどこまでも沈んで行った。そしてぐったりと喘ぎながらも、少年の瞳は一切の奥底を見てとったのである。——夜蛾の群が、不意に波立ちはじめた。ひとしきり激しく、翹紋が渦を巻いた。少年をつつみこんで、光と色彩とが砕け散った。少年の瞳が閉ざされた。がっくりと首がたれた。段々と気が遠くなって行って、無数の夜蛾の群がなおも狂おしく羽ばたいているのが、ただぼんやりと感じられた。僕は死んでゆくのだな。ここに集ってきた蛾たちと一緒に。少年は消えてゆく意識のなかでわずかにそう考えた。——

……少年は我に帰った。夢だったのかしら？ たしかに、まだ冬だった。窓の外を粉雪がちらついているのが見えたから。天井には相変らず見慣れた木目がくすんでいた。——眼が覚めたの。ずいぶんうなされていましたよ。尿をとりにきた母親の声がかきこえた。もう熱は下がったようね。額に手をおかれて、少年は甘えるように熱に疲れた顔をしかめた。僕、なんともないよ。母親のいたわるような優しさが恥ずかしかった。不意に、まったく急に、ひとつの願望が満たされたた

めだろうか、忘れていたもうひとつの願望が襲ってきた。母親の顔をまっすぐに見て、おかしいほど勢いこんで尋ねた。何時になったら梅干食べられる？ そうね、あと十日。ふっと答えてしまった母親は、すぐに失敗ったと思った。少年もやはり後悔していた。仕方なしに、今日はお医者さまがくる日だね？ と白ばくれた。そして、あのクリームの匂いのするお医者さまが、なにか新しい食物を許してくれるといいなと考えた。それからまたこうも思った。どうしてあのお医者さまは、ああも海豹ホッキョクに似てるんだらうな。

### 幼いメルクリウス

未明、暁の女神アウロラがまだその褥から身を起さない頃、メルクリウスは母マイアから生れた。マイアは優しく赤子の顔を覗きこんだが、生れたばかりの赤子は、ぱっちり眼をあけると悪戯っぽく笑い、いきなり口をとんがらせてみせた。マイアは激しく驚ろき、乳を与えるのも忘れて洞窟からとびだしてしまった。メルクリウスは慌てた母の後姿に打興じて、

「お母ちゃん、そんなに慌ててどうするの。僕にオッパイくれないつもり？」と、きいろい声でわめきたてた。

マイアは気も転倒しながら、それでも揺籃ゆりかごの傍らに戻ってきて、おろおろと赤子に乳をふくま

せたが、どうしても胸の動悸はしずまらない。わが子ながらうす気味がわるく、マイアは額をぬぐって我知らず独り言をもらした。

「この子は、父親が父親だから、赤坊のくせにこんなに大人びているのかも知れない」

メルクリウスは乳をしゃぶりながら、小賢しい眼で母の顔を見あげ、

「僕のお父ちゃんて一体誰さ」

「それはね、……誰にも言っちゃいけませんよ。お前のお父さまはユピテルという一番えらい神さまです。お前もお父さまのように……」

「じゃあ、そのユピテルがお母ちゃんに惚れたって訳だね？」

マイアは桜ん坊のように赤くなった。すっかりどぎまぎしてしまつて、誰か聞いている者はいないかとあたりを見まわしたのである。

正午になると、メルクリウスは早くも揺籃から這いだし、そこらのありあわせの器物を使って、一種の弦楽器を造りあげた。それを掻き鳴らして、きんきら声で唄った。影多い洞窟の情緒を唄い、周囲に転っている三脚や容器を唄い、およそ眼にふれたものを巧みに詩句に織りなして唄ったのである。マイアは驚ろくやら嬉しいやら、不安そうな、しかし惚々した眼でわが子のふるまいを眺めながら、「まあ、この子は。まあ、この子は……」と繰返すばかりであった。ところがメルクリウスは益々声をはりあげて、はなはだ早熟なことを唄いはじめた。

「僕の父ちゃんユピテルは、人目を忍んで母ちゃんと……」



マイアはこれはえらいことになったと胆をつぶした。すぐさま赤子から楽器をとりあげ、もつと大人しく遊びなさいと叱りつけた。メルクリウスは口をとんがらせて、

「そんなに怒るもんじゃないよ、母ちゃん。怒ったときの自分の顔を水鏡に映して見てごらんよ。父ちゃんだって愛想がつかるぜ」

そしてお尻をぶたれないうちに、素早く洞窟からとびだして行った。

メルクリウスは初めて眼に映る外界の事象がもの珍しく、草花を、陽光を、鳥を虫を、感慨をこめて唄って歩いたが、楽器のないのがやはり物足りない。するとそこに、のこのこと一匹の亀が這ってきた。

「あなたは本当にうらやましい。あなたみたいに唄えたらなあ」と、亀はおませの子にむかって言いながら、人の好きそうな小さな眼をしょぼしょぼさせた。

一方、メルクリウスは亀を見るより早く、心のうちで膝を叩いた。こいつはうってつけた。あの丸く盛りあがった甲羅は、おそらく糸を響かせるのに都合がよいにちがいない。

「君は歌が唄いたいの？」

「ええ、私は唄えなくて残念でたまりません。どうも生れつき音痴なんでね」

「だけど歌を唄うことは、冗談半分じゃできないぜ」

「それは覚悟しています」

「生命がけだぜ」